様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３１ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１５７８９

研究課題名（和文）急性期認知症看護モデルを用いた戦略的ベンチマーキング開発とケアネットワークの構築

研究課題名（英文）Construction on the development of the strategic benchmarking and care net work using the dementia nursing in the acute care setting model

研究代表者
鈴木　みずえ（Suzuki, Mizue）

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：４０２８３３６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、急性期におけるベストプラクティスをめざした戦略的ベンチマーキングの開発と地域におけるケアネットシステムの構築である。急性期看護の戦略的ベンチマーキングのでは、評価指標を急性期認知症看護尺度、身体拘束、せん妄の発生率等などレーダーチャートで示してフィードバックを行った。急性期認知症看護における認知症模擬患者(SP)によるパーソン・センタード・ケアの導入プログラムは、看護師を対象に講義、せん妄のある認知症SPセッション、グループ討議から構成された。対象者全員が認知症やせん妄に関する理解が深まり、専門知識と看護実践を統合させて実践を振り返り、ケアネットシステムを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
わが国の認知症施策５か年計画（平成25～29年）（オレンジプラン）では一般病院勤務の医療従事者に対する認知症対応力向上研修が実施されているが、看護師の受講者が少ない。一方、看護の質を向上するための手法として、病院の実態を踏まえた目標設定や具体的取りくみの内容の検討を主眼に看護の質評価のためのデータベース構築と効果検証に関する研究が行われているが、急性期認知症看護に関する取り組みや報告は全くみられず、本研究は国内外でも初めての取り組みである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was the development of the strategic benchmarking aiming at the best practice in the acute phase and the construction of the Care Net system in the community. The strategic benchmarking in the acute care setting included that the dementia nursing scale, physical restriction, delirium were shown the radar chart in the acute care setting, and those results were fed back. The program of the person center care by the dementia simulated patient (SP) in the dementia nursing was comprised of lectures, dementia SP sessions with delirium, group discussion among nurses in the an acute care setting .All the subjects understood knowledge on dementia and delirium deeply. Nurses integrated with technical knowledge and nursing intervention, and looked back on their own practice, and the base of the Care Net system was established.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症　ベンチマーキング　急性期認知症看護　ケアネットワーク

１．研究開始当初の背景

わが国の超高齢化に伴い、急性期病院では認知症の行動・心理症状(BPSD)やせん妄のある高齢者が増加して看護師はさまざまな困難な状況に遭遇している。急性期病院の認知症高齢者の研修などが実施されるようになったが、ベストプラクティスのモデルやアウトカム評価がなされていない。研究代表者は平成 24 年～26 年度萌芽研究で急性期認知症看護モデルと急性期認知症看護尺度を開発した。

２．研究の目的

本研究では、急性期認知機能障害高齢者モデルをもとに急性期におけるベストプラクティスをめざした戦略的ベンチマーキングの開発と地域におけるケアネットワークシステムの構築を目的とする。本研究は急性期病院の臨床看護師からも早急に実施してほしいとの要望に基づいたもので、従来の身体拘束や抑制に対する挑戦的取り組みでもある。

(1) 急性期看護の戦略的ベンチマーキングの開発

急性期認知機能障害高齢者モデルをもとに、認知症看護の質など、自らの戦略的変革活動内容を判定できるベンチマークを開発する。

(2)急性期病院の看護師が実践する身体拘束の関連要因

身体拘束縮小化を目指した認知症ケアチームによる医療の質向上のために、2016 年度診療報酬改定に「認知症ケア加算」が新設されたが、認知症ケア加算の実施病棟では身体拘束率は 42.0%であり、実施病棟の方が有意に低かったが、全体では身体拘束率は 44.5%と認知症高齢患者の 4 割以上は身体拘束が行われているのが現状である。本研究の目的は、急性期病院において看護師が実践する身体拘束の実施の関連要因として看護師の看護実践に関する自己評価などを用いて明らかにすることである。

(3)認知症模擬患者によるパーソン・センタード・ケアの導入プログラム研修の開発

近年、認知症模擬患者（Simulated Patient；SP）を用いたシミュレーション体験が看護基礎教育に導入され、実際の看護場面と類似した学習効果が報告されている。看護師においてもせん妄のある認知症高齢者の SP セッションは、相互関係の重要性を基盤とするパーソン・センタード・ケアの実践の導入に効果的であると考えた。本研究の目的は、認知症模擬患者(Simulated Patient; SP)を用いた研修プログラムを開発し、効果を明らかにすることである。

(4)急性期認知症看護のケアネットワークの構築

(1)～(3)の活動を通して急性期認知症看護のケアネットワークを構築する。

３．研究の方法

(1) 急性期看護の戦略的ベンチマーキングの開発

ベンチマーク評価のために利用する評価指標は、Donabedian（1988）が提唱した医療の質評価の枠組みであるストラクチャー、プロセス、アウトカムの側面から認知症看護の質など、自らの戦略的変革活動内容を判定できる項目を抽出する。ストラクチャーは看護組織、労働状況や看護職背景、患者背景等とした。プロセスは看護実践の内容（急性期認知症看護尺度)、アウトカムは看護実践の結果、身体拘束・抑制、BPSD・せん妄の発生率等などとして、レーダーチャート、グラフなどで示し、１年間の変化や実態が把握できるようにした。参加施設別、各病棟別に項目を整理して２年間経過を報告した。

(2)急性期病院の看護師が実践する身体拘束の関連要因

本研究は、2016 年 4 月～2017 年 3 月に、H市における 4 病院（7 対 1 の 500 床以上）の病棟看護師を対象とした。急性期病院の身体拘束において、体幹帯の使用、ミトン型手袋の着用、車椅子などの腰ベルトの使用、介護衣の着用、ベッド柵の使用、向精神薬などの内服に関する 6 項目に対して評価などを依頼した。

(3)認知症模擬患者によるパーソン・センタード・ケアの導入プログラム研修の開発

本プログラムは、急性期病院の看護師を対象とし、講義、せん妄のある認知症 SP セッション、グループ討議から構成された。対象者 18 人の教育効果の評価であるアンケートとグループ討議を実施した。

(4)急性期認知症看護のケアネットワークの構築

SP 研修や認知症高齢者の意思決定支援の研修、認知症ケアを考える会を定期的に実施し、情報交換することで S 県西部地域の認知症看護認定看護師を中心にネットワークが構築された。

４．研究成果

(1) 急性期看護の戦略的ベンチマーキングの開発

参加施設別、各病棟別に項目を整理して２年間経過を報告した。それぞれの２年間の差についても報告したが、研修の効果や病棟別の取り組みの効果などが明らかになった。しかしながら、スタッフの退職、病棟の再編成などもあり、変化の要因が上手く分析できないところもあった。しかしながら客観的変化の詳細な変化の理由を十分明らかにできなかった病棟もあった。

(2)急性期病院の看護師が実践する身体拘束の関連要因

身体拘束の実施を目的変数とした重回帰分析では、急性期病院の認知障害高齢者のための看護実践自己評価尺度の「起こりうる問題を予測した社会心理的アプローチを含めたケア」、「認知機能と本人に合わせた独自性のあるケア」、看護実践能力自己評価尺度（CNCSS)の「質の改善」が有意に身体拘束を減少させていた。結論：急性期病院におけるパーソン・センタード・ケアや臨床倫理を基盤とした看護実践が身体拘束を減少させている可能性が示唆された。今後、病

院における看護実践に関する安全管理と患者の尊厳尊重のバランスなどの課題が明らかになった。

(3)認知症模擬患者によるパーソン・センタード・ケアの導入プログラム研修の開発

対象者全員がパーソン・センタード・ケアやせん妄に関する理解が深まり、実践で活用したいと回答した。グループワークの内容の質的分析結果では、1)認知症高齢者を１人の人として尊重、2)気持ちに共感するコミュニケーション方法、3)看護チームとしてかかわりを大切にする、4)身体拘束をしない入院中の安全の確保、5)身体症状や思いも含めたアセスメント、6)せん妄に応じた具体的なケアの実践の６つのカテゴリーが抽出された。専門知識と看護実践を統合させて実践を振り返ることから、パーソン・センタード・ケアに向けての具体的なケアの方向性が明確となるなどの効果がうかがえた。

(4)急性期認知症看護のケアネットワークの構築

各 SP 研修会や認知症ケアを考える会などを通して情報交換を行ったり、他施設の見学などを行うことでそれぞれの病院の認知症に関する課題を討議できた。さらに、参加した看護師は共通する課題については対策などを検討し、今後の方向性などをお互いに確認し、アクションプランにつなげることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 30 件）

① 朴信江，鈴木みずえ：有料老人ホームに勤務するケアスタッフのパーソン・センタード・ケアの意識と職場環境との関連性．日本認知症ケア学会誌，17（4）：685-695，2019.

② 鈴木みずえ：気づきが実践となる福祉用具活用の手引き　転倒対策に必要な環境支援のエビデンス．臨床作業療法，15（6）：472-476，2019.

③ 鈴木みずえ，内藤智義：老年医学(下)-基礎・臨床研究の最新動向-老年看護学　高齢者に特有な疾患への看護におけるアセスメントとケア　骨・運動器系疾患(骨粗鬆症・転倒・骨折)．日本臨床，76（増刊 7）：733-737．2018.

④ 鈴木みずえ，服部英幸，阿部邦彦，中村裕子，猿原孝行：高齢者施設における認知症高齢者の生活支障尺度の信頼性・妥当性の検討．日本老年医学会雑誌，55（3）：386-394，2018.

⑤ 杉山智子，梅原里実，鈴木みずえ：最新転倒・転落リスクアセスメントツールを求めて～現状の課題と展望～介護老人保健施設における転倒・転落事故予防の課題．日本転倒予防学会誌，5（1）：61-63，2018.

⑥ 征矢野あや子，鈴木みずえ，原田敦，岡田真平，上内哲男：最新転倒・転落リスクアセスメントツールを求めて～現状の課題と展望～日本転倒予防学会会員を対象とする転倒・転落リスクを把握する方法に関する質問紙調査の報告．日本転倒予防学会誌，5（1）：41-49，2018.

⑦ 鈴木みずえ，服部英幸，福田耕嗣，大城一，猿原孝行，古田良江，阿部邦彦，金森雅夫：介護保険施設に入所する認知症高齢者の BPSD に及ぼす生活の質（QOL）の影響．日本老年医学会雑誌，54（3）：392-402，2017.

⑧ 鈴木みずえ，吉村浩美，水野裕，金森雅夫，長田久雄：パーソン・センタード・ケアをめざした認知症看護教育プログラムの効果　看護師に対する視聴覚教材（DVD）を用いた研修のリフレクション．日本早期認知症学会誌，10（1）：35-42，2017.

⑨ Fukuda K, Terada S, Hashimoto M, Ukai K, Kumagai R, Suzuki M, Nagaya M, Yoshida M, Hattori H, Murotani K, Toba K：Effectiveness of educational program using printed educational material on care burden distress among staff of residential aged care facilities without medical specialists and/or registered nurses: Cluster quasi-randomization study. Geriatr Gerontol Int. 18(3):487-494, 2018.

⑩ 鈴木みずえ：超高齢社会における看護のパラダイムの転換　最期まで輝く人生を支援するための看護の創造．老年看護学，22（2）：5-9，2018.

⑪ 鈴木みずえ：地域看護に活用できるインデックス（No.14）高齢者の転倒予防．日本地域看護学会誌，20（3）：68-73，2017.

⑫ 鈴木みずえ, 内藤智義：【高齢者の転倒】転倒予防　看護師の立場から. Geriatric Medicine, 55（9）：1007-1011，2017.

⑬ 鈴木みずえ，金森雅夫：認知症の痛み 認知症高齢者の痛み　疫学調査．臨床整形外科，52⑺：611-617，2017.

⑭ 鈴木みずえ：【訪問看護におけるリスクマネジメント　療養者・家族・医療者の安全をどう確保するか】療養上の世話におけるリスクマネジメント　転倒・転落．看護技術，63⑸：458-465，2017.

⑮ 鈴木みずえ：【特徴を理解して対応する!認知症を合併するがん患者への支援】認知症を正しく理解するために知っておきたいこと．Oncology Nurse，10⑶：88-93，2017.

⑯ 鈴木みずえ，吉村浩美，宗像倫子，鈴木美恵子，須永訓子，勝原裕美子，桑原弓枝，水野裕，長田久雄：急性期病院の認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度の開発．老年看護学，20⑵：36-46，2016.

⑰ 鈴木みずえ，丸岡直子，加藤真由美，平松知子，谷口好美，小林小百合，岡本恵里，水谷信子，泉キヨ子，高原昭，赤井信太郎，住若智子，古田良江：老人保健施設の看護師による認知症高齢者のための転倒予防看護質指標の実態とその関連要因．日本転倒予防学会誌，2⑴，9-18，2015.

⑱ 鈴木みずえ, 吉村浩美, 山岸暁美, 江上直美, 高木智美, 高野智子, 水野裕：急性期病院の高齢者集合ケアにおける認知症ケアマッピング（DCM）がケアスタッフに及ぼす効果. 日本早期認知症学会誌, 8（1）：89-98, 2015.
⑲ Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Abe Y, Suzuki M: Literature review of pain management for people with chronic pain. Japan Journal of Nursing Science 12(3):167-183. 2015.
㉑ Ito T, Umise S, Hoshi H, Suzuki M, Tani S: Gait measurement and evaluation system for diagnosis of elderly people's gait condition to prevent fall. 2015 IEEE International Conference on Advanced Intelligent Mechatronics (AIM) , 687 - 693, 2015.
㉒ 鈴木みずえ：認知症高齢者の転倒ﾘｽｸとその予防へのケア　気づく力と見守る目を養う危険予知ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞを中心に. Geriatric Medicine, 53（8）：815-825, 2015.
㉓ 鈴木みずえ：認知症の方への転倒予防マニュアル:夜間の転倒予防　昼夜ﾘｽﾞﾑ障害・夜間の徘徊から起こる転倒を予防する. 認知症ケア最前線, 54：92-94, 2015.
㉔ 鈴木みずえ：認知症の方への転倒予防マニュアル:認知症の方の「転倒につながる行動」を予防する. 認知症ケア最前線, 53：112-116, 2015.
㉕ 鈴木みずえ：認知症の方への転倒予防マニュアル:認知症の中核症状から起こる転倒を予防する. 認知症ケア最前線, 52：102-104, 2015.
㉖ 鈴木みずえ：認知症の人の痛みの考え方とケア. おはよう 21, 26（13）：64-67, 2015.
㉗ 鈴木みずえ：認知症の方への転倒予防マニュアル（最終回）認知症の方への生活環境設定の工夫. 認知症ケア最前線, 55：99-103, 2016.
㉘ 鈴木みずえ：認知症の方への転倒予防マニュアル（第 2 回）転倒してしまったときの対応方法. 認知症ケア最前線, 51：70-72, 2015.
㉙ 鈴木みずえ：【転倒・転落ﾊｲﾘｽｸ患者へのアプローチ】（Part1.）転倒・転落の考え方と転倒・転落ﾘｽｸのアセスメント. 看護技術, 61（6）：577-585, 2015.
㉚ 鈴木みずえ, 金森雅夫：認知症高齢者の転倒予防におけるエビデンスに基づくケア介入. 日本転倒予防学会誌, 1（3）：3-9, 2015.

〔学会発表〕（計 35 件）
① 加藤真由美, 泉キヨ子, 鈴木みずえ, 上野栄一, 正源寺美穂：看護師の臨床判断における転倒につながる「ふらつき」の言語化. 日本看護科学学会学術集会講演集 38 回：2-8-45, 2018.
② 鈴木みずえ, 吉村浩美：急性期病院における認知障害高齢者に対する看護実践自己効力感尺度の検討. 日本看護科学学会学術集会講演集 38 回：1-2-19, 2018.
③ 内藤智義, 鈴木みずえ, 古田良江：介護施設における排泄障害を伴う認知症高齢者への転倒予防ケアの構造　看護職・介護職のチームアプローチに焦点を当てて. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：134, 2018.
④ 稲垣圭吾, 渥美友梨, 柘植美咲, 鳥居史愛, 松崎花奈子, 伊藤友孝, 谷重喜, 鈴木みずえ：在宅高齢者の筋力の 1 年間の変化と歩行機能, 転倒要因, 健康関連 QOL の関係. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：130, 2018.
⑤ 清水美香, 伊藤湯加理, 鈴木みずえ：急性期病院における脳卒中患者に対する転倒・転落予防ケアに関する研究　ベテラン看護師へのインタビュー調査から. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：107, 2018.
⑥ 金森雅夫, 鈴木みずえ, 平松知子, 加藤真由美, 谷口好美, 丸岡直子, 六角遼子, 小林小百合, 島田裕之, 泉キヨ子：認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果　3 地区における 1 日あたりの転倒の発生率に関する分析. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：90, 2018.
⑦ 丸岡直子, 谷口好美, 加藤真由美, 平松知子, 鈴木みずえ：認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムからの学びと活用　北陸地区ケアスタッフのインタビューから. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：89, 2018.
⑧ 古田良江, 鈴木みずえ, 松井陽子, 大鷹悦子, 市川智恵子, 阿部邦彦, 内藤智義, 島田裕之, 金森雅夫：介護老人保健施設における認知症高齢者に対する転倒予防に関する介入プログラムの効果. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：88, 2018.
⑨ 谷口好美, 平松知子, 加藤真由美, 丸岡直子, 能登智重, 前田直大, 鈴木みずえ：認知症高齢者の転倒予防ケア質評価指標によるケア介入プログラムの効果　北陸のケアスタッフの転倒予防に対する意識変化の比較. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：88, 2018.
⑩ 杉山智子, 梅原里実, 鈴木みずえ：最新転倒・転落アセスメント・ツールの展開　転倒予防の観点からみた介護老人保健施設における施設管理・システムに関する実態調査. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：56, 2018.
⑪ 鈴木みずえ：転倒予防学における課題と構築　認知症高齢者の転倒予防の取り組みから. 日本転倒予防学会誌, 5（2）：36, 2018.
⑫ 鈴木みずえ：高齢者の転倒予防対策　転倒ﾘｽｸアセスメントツールを活用した転倒予防対策と認知症高齢者に対する転倒予防（看護の立場から）. 日本老年医学会雑誌, 55：63, 2018.
⑬ 鳥羽研二, 石橋英明, 神崎恒一, 近藤和泉, 鈴木みずえ：今後の転倒予防研究の行方と現場での応用. Loco Cure, 4（3）：187-197, 2018.
⑭ 尾之内直美, 服部英幸, 牧陽子, 鈴木みずえ, 寺田整司, 山野目章夫：認知症の家族介護者が

経験する社会的な生活支障とその支援についての検討. 日本認知症ケア学会誌, 17 (1) :221, 2018.

⑮ 内藤智義, 清水隆裕, 鈴木みずえ, 古田良江:特別養護老人ホームにおける看護職が実践している認知症高齢者への排便ケアの構造. 日本認知症ケア学会誌, 17 (1) :168, 2018.

⑯ 鈴木みずえ, 松井陽子, 大鷹悦子, 市川智恵子, 古田良江, 阿部邦彦, 内藤智義, 金森雅夫:認知症高齢者に対する転倒予防に関する介入研究 介護老人保健施設におけるケアスタッフの意識の変化. 日本認知症ケア学会誌, 17 (1) :165, 2018.

⑰ 吉村浩美, 鈴木みずえ:急性期病院におけるパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度の変化. 日本医療マネジメント学会雑誌, 19:294, 2018.

⑱ 鈴木みずえ, 内藤智義:認知症高齢者の日常生活動作 (ADL)、認知機能と認知症の行動・心理症状 (BPSD) の関連性. 日本看護科学学会学術集会講演集 37 回:PF-70-7, 2017.

⑲ 加藤真由美, 泉キヨ子, 上野栄一, 鈴木みずえ, 正源寺美穂:省察の概念分析 分析の目的と用法. 日本看護科学学会学術集会講演集 37 回:PA-40-6, 2017.

⑳ 吉村浩美, 小野五月, 江上直美, 篠崎恵美子, 鈴木みずえ:急性期病院院内ディケアに参加する高齢患者の変化についての看護師の認識. 日本早期認知症学会誌, 10 (3) :70, 2017.

㉑ 菅野真紀, 鈴木みずえ:地域高齢者の睡眠と活動・認知・心理機能との関連. 日本早期認知症学会誌, 10 (3) :60, 2017.

㉒ 鈴木みずえ, 服部英幸, 大城一, 猿原孝行, 古田良江, 内藤智義, 阿部邦彦, 福田耕嗣, 金森雅夫:介護保険施設に入所する認知症高齢者の認知症の行動・心理症状 (BPSD) と認知機能がケア依存度に及ぼす影響. 日本早期認知症学会誌, 10 (3) :58, 2017.

㉓ 阿部邦彦, 鈴木みずえ, 松井陽子, 市川智恵子, 大鷹悦子, 古田良江:介護老人保健施設における認知症高齢者に対する転倒・転落予防介入研究 グループインタビューによるケアスタッフの介入による意識の変化. 日本転倒予防学会誌, 4 (2) :117, 2017.

㉔ 杉山智子, 梅原里実, 鈴木みずえ, 転倒・転落アセスメントツール検討委員会高齢者施設グループ:最新転倒・転落アセスメント・ツールを求めて 現状の課題と展望 介護老人保健施設における転倒事故予防の課題. 日本転倒予防学会誌, 4 (2) :39, 2017.

㉕ 阿部邦彦, 鈴木みずえ, 中村裕子, 服部英幸:認知症生活障害の支援と課題 老人保健施設における認知症高齢者の生活支障包括尺度の開発. 日本老年医学会雑誌, 54:97, 2017.

㉖ 鈴木みずえ, 阿部ゆみ子, 鈴木智子, 篠崎恵美子, 吉村浩美:認知症模擬患者 (SP) を用いた急性期病院看護シミュレーションプログラムの開発 せん妄の状態の認知症高齢者に対するパーソン・センタード・ケア. 日本認知症ケア学会誌, 16 (1) :333, 2017.

㉗ 吉村浩美, 鈴木みずえ, 佐藤晶子, 阿部ゆみ子:急性期病院の院内ディケアにおける認知症ケアマッピングの試み 行動カテゴリーP (身体的なケア) の試験的分類. 日本認知症ケア学会誌, 16 (1) :159, 2017.

㉘ 鈴木みずえ:老健施設における看護人材確保に向けて 超高齢社会における看護のパラダイムの転換 最期まで輝く人生を支援するための老年看護の創造から. 老健:全国老人保健施設協会機関誌, 28 (5) :12-13, 2017.

㉙ 藤原美由紀, 三枝智宏, 鈴木みずえ:入院高齢患者の認知症の行動・心理症状の心身ケア依存度への影響. 地域医療, 第 55 回特集:594-597, 2016.

㉚ 征矢野あや子, 鈴木みずえ, 原田敦, 岡田真平, 上内哲男:転倒・転落リスクのアセスメントツールに関する調査の概要報告. 日本転倒予防学会誌, 3 (2) :68, 2016.

㉛ 鈴木みずえ, 吉村浩美, 金森雅夫, 長田久雄:パーソン・センタード・ケアをめざした急性期病院における認知症看護研修プログラムの検討 視聴覚教材 (DVD) を用いたリフレクションの効果. 日本早期認知症学会誌, 9 (3) :95, 2016.

㉜ 鈴木みずえ, 篠崎恵美子, 吉村浩美:看護教育における認知症模擬患者 (Simulated Patient:SP) を用いたシミュレーション学習の効果 看護学生の訪問看護に関する演習を通して. 日本認知症ケア学会誌, 15 (1) :322, 2016.

㉝ 村田康子, 中村裕子, 鈴木みずえ, 田邊薫, 渡辺恵美子, 関口清貴, 吉村浩美, 佐久間尚実, 桑野康一, 水野裕:パーソン・センタード・ケア視聴覚教材"共に歩む"の開発と試行結果 (第 1 報) 試行研修のアンケート結果を通して. 日本認知症ケア学会誌, 15 (1) :307, 2016.

㉞ 木本明恵, 鈴木みずえ, 千葉京子, 石倉真由, 工藤千秋:タクティールケアが認知症高齢者における心理面の有効性に関する研究 TDMS (二次元気分尺度) を用いた検討. 日本認知症ケア学会誌, 15 (1) :246, 2016.

㉟ 鈴木みずえ:認知症高齢者の転倒予防. 臨床神経学, 55: S25, 2015.

〔図書〕(計 15 件)

① 鈴木みずえ:認知症 plus 転倒予防 せん妄・排泄障害を含めた包括的ケア. 2019, 池田書店, 248 ページ

② 鈴木みずえ, 内門大丈:3ステップ式パーソン・センタード・ケアでよくわかる 認知症看護のきほん. 2019, 池田書店, 224 ページ

③ 鈴木みずえ (編集), 高井ゆかり (編集):認知症の人の「痛み」をケアする―「痛み」が引き起こすBPSD・せん妄の予防. 2018, 日本看護協会出版会, 215 ページ

④ 鈴木みずえ:認知症の看護・介護の役立つ よくわかる パーソン・センタード・ケア. 2017, 池田書

店, 160 ページ
⑤ 鈴木みずえ:認知症の人の気持ちがよくわかる聞き方･話し方. 2017, 池田書店, 192 ページ
⑥ 鈴木みずえ:多職種チームで取り組む認知症ケアの手引き. 2017, 日本看護協会出版会.
⑦ 鈴木みずえ, 酒井郁子編集:パーソン･センタード･ケアでひらく認知症看護の扉. 南江堂, 2018, 315 ページ
⑧ 鈴木みずえ:認知症と転倒, p.64, 武藤芳照, 奥泉宏康, 北湯口純編, 日本転倒予防学会認定転倒予防指導士 公式テキスト Q&A, 新興医学出版社, 2017, 144 ページ
⑨ 鈴木みずえ:認知症の特徴と症状は？p.65-66, 武藤芳照, 奥泉宏康, 北湯口純編, 日本転倒予防学会認定 転倒予防指導士 公式テキスト Q&A, 新興医学出版社, 2017, 144 ページ
⑩ 鈴木みずえ:超高齢者における看護のパラダダイムの転換－最期まで輝く人生を支援するための看護の創造, p.34-36, 大島伸一･新井秀典編, 治し支える医療へ向けて, 医学と社会の大転換を, ライフサイエンス社, 2018, 153 ページ
⑪ 鈴木みずえ:認知症高齢者の転倒予防の倫理的課題は, p.95-100, 武藤芳照, 原田敦, 鈴木みず編集, 認知症者の転倒予防とリスクマネジメント－病院･施設･在宅でのケア－第3版, 2017, 424 ページ
⑫ 鈴木みずえ:急性期病院での認知症ケア, p89-97, 島田裕之(編集), フレイルの予防とリハビリテーション, 東京, 医歯薬出版, 2015, 181 ページ
⑬ 鈴木みずえ:高齢者の転倒に関する看護の問題, p127-141, 上田諭(編集), 認知症によりそう(こころの科学)－「治す」から「あるがまま」へ, 東京, 日本評論社, 2015, 156 ページ
⑭ 鈴木みずえ:老年症候群とフレイル, p21-29, 萩野浩(編集), 医療･介護スタッフのための高齢者の転倒･骨折予防－転ばぬ先の生活指導, 大阪, 医薬ジャーナル社, 2015, 183 ページ
⑮ 鈴木みずえ:安全管理の技術, 456-487, 鈴木みずえ, 片山はるみ編集, なぜ？できる？わかる？私の看護技術, 2015, 540 ページ

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：吉村　浩美
ローマ字氏名：Yoshimura Hiromi
所属研究機関名：聖隷クリストファー大学
部局名：看護学部
職名：臨床教授
研究者番号（8 桁）：10573793